縄文時代中期の石斧つくりのムラ

浦山寺蔵遺跡２

【土器・石器編】

２０１２年３月

富山県埋蔵文化財センター

富山県

目　次

縄文時代中期の石斧つくりのムラ　浦山寺蔵遺跡……1
主な出土遺物……1
磨製石斧をつくる……1
石斧の素材……2
石材の加工……2
擦切技法による製作……2
蛇紋岩製磨製石斧の流通……2
いろいろな形の土器……2
いろいろな特徴の土器……3
石器写真１……4
土器写真１……8

※　土器写真の縮尺は統一してありません。

縄文時代中期の土器

小型磨製石斧・玉類・石冠

石器つくりの道具・石棒

擦石・凹石・敲石・石錘・打製石斧

縄文時代中期の石斧つくりのムラ　浦山寺蔵遺跡

浦山寺蔵遺跡は、黒部市（旧宇奈月町）浦山字氷解・寺沢・越割の標高125～140mの黒部川左岸の河岸段丘の奥まった所に位置します。その東側には、丘陵を開析して流れる寺蔵谷川が黒部川に向かい北流しており、段丘上に寺蔵谷川が作り出した扇状地形の扇頂部に遺跡はあります。

昭和51年にほ場整備事業に先がけて約750m²の発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代中期前葉から後期前葉（約4,500～4,000年前）、が複合する集落遺跡と確認されました。調査区全体では、竪穴住居15棟（石組炉５・地床炉３・貼床１を含む）、土坑57か所以上と、立石５か所、埋め甕・伏せ甕（幼児などの埋葬施設）が各１か所確認されています。たくさんの遺物が見つかることから、大規模な集落があると考えられました。

主な出土遺物

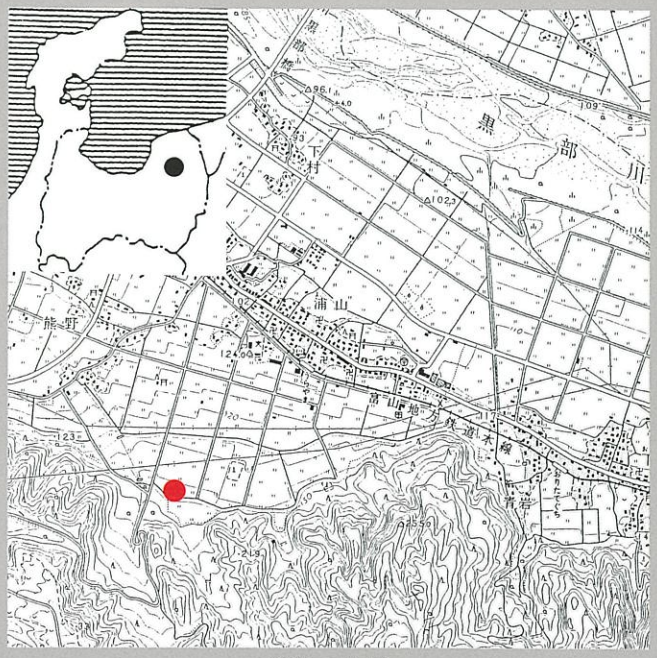
遺物には、中期前葉から後期初めにかけての大量の土器（深鉢・浅鉢・小形土器・有孔鍔付土器・器台・釣手土器）や土製品（土偶・滑車形耳飾・三角形板状土器片加工品・円板形土器片加工品）、石器（磨製石斧・打製石斧・石鏃・石匙・擦石・敲石・磨石・凹石・石皿・石錘・擦切具・砥石・石棒・石冠・ヒスイ製玉類・玉未成品・円板状石製品）があります。また、石斧未成品には黒部川の川原から採集したと考えられる蛇紋岩を使用し、製作工程がわかるものが多くあります。

時代区分			北陸の時期区分	
旧石器時代		1万4000年前		
縄文時代	草創期	1万年前	前葉	新保Ⅰ 新保Ⅱ 新崎Ⅰ 新崎Ⅱ ○ 新崎Ⅲ ●
	早期	6000年前		
	前期	5000年前	中葉	上山田・天神山Ⅰ ● 上山田・天神山Ⅱ ● 古府Ⅰ ● 古府Ⅱ ● 古串田新 ○
	中期	4000年前		
	後期	3000年前	後葉	串田新Ⅰ（大杉谷） ○ 串田新Ⅱ ● 前田・岩峅野 ●
	晩期	2300年前	前葉	気屋Ⅰ ○ 気屋Ⅱ ○
弥生時代				

●遺跡の主な時代

磨製石斧を作る

磨製石斧は、木の伐採や加工具に利用された石器です。その素材となる蛇紋岩は、富山県東部（黒部川以東）から新潟県西部（姫川河口）かけての地域で海岸や河川の転石として広く産出し、旧石器時代から縄文時代、弥生時代の間、長く利用されました。特に縄文時代中期前葉以降には、この地域で盛んに磨製石斧が作られ、地域を越えて広く流通したことが知られています。また、県内では石材が異なる凝灰岩・硬砂岩を利用する石斧作りが常願寺川流域で知られています。このような石器を作る村からは、打ち割ったり、こつこつと素材を敲くための敲石（ハンマー）やその台として使った表面が窪んだ台石、磨くための砥石などがたくさん見つかります。



遺跡の位置

石斧の素材　石斧の材料となる蛇紋岩などは、黒部川の川原から採集したものが利用されたと考えられます。川原からの距離は約２kmですが、材料となる石材には、10kg以上になると考えられる大きなものも見られます。このような大きな石材では、敲いて扇形の厚めの横長の剥片を剥ぎ取り、石斧の材料とします。また、手ごろな大きさの川原石を素材として作る方法も

見られます。海岸に近い境A遺跡では、海岸転石を利用した、後者の作り方が多く見られました。遺跡の立地する場所や条件によって入手できる素材の大きさが違う事から、場所に応じた効率的な製作方法が取られていたようです。

石材の加工　①基本的に側辺から小剥離や敲打を加えて、大まかな長方形に整える。②さらに敲打による成形により石斧状に仕上げてゆく。

③研磨を加えて形を整え、完成品となる。このような手順で作られます。しかし、①からすぐに研磨に入るものも見られつくり方は一様ではありません。

破損品を見ると加工の①・②工程での破損品が最も多く見られ、廃棄されています。遺跡から見つかるのはほとんどこのような、失敗品です。

擦切技法による製作

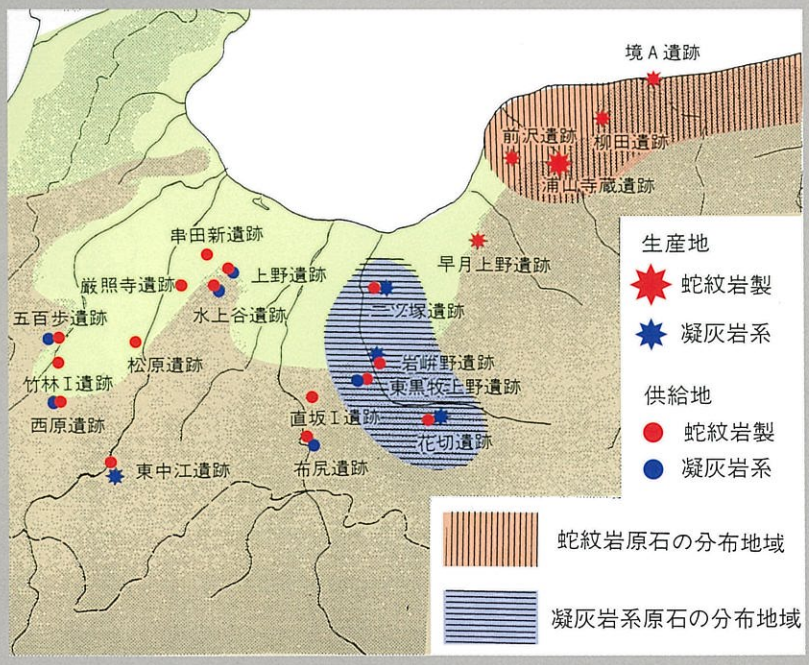
擦切石器（擦切具）と呼ばれる長さ10cm、厚さ１cmほどの砂岩の砥石側辺を用いて、溝を設け磨製石斧を作る素材を分割する方法で作られるものです。完成品で痕跡を残す例は見つかっていません。

剥片素材①や扁平な素材を磨き、溝を施す例や①の自然面にいきなり溝を設ける例などがあります。しかし、完成品とするまでの工程では小剥離・敲打を加え整形し、研磨を加えて完成品とする製作技法は共通です。採集される原材の大きさにより使い分けられたと考えられています。

磨製石斧（製品の破損品）

蛇紋岩製磨製石斧の流通

北陸をはじめとして未成品や製作工具類が出土せず、原産地が近くに無く「製品」だけが出土する遺跡が多くあります。このような遺跡では「製品」を入手していたと考えられます。このようなあり方を見ると縄文中期前葉以降は、蛇紋岩製磨製石斧を製品として入手し消費することが一般的に行われていたようです。大量に生産する北陸のこの地域から日本の各地に蛇紋岩製の石斧がもたらされていたと考えられます。



磨製石斧の産地・供給地（斧の文化掲載図を改変）

いろいろな形の土器　土器には、深鉢（煮炊きに使う）　浅鉢（盛り付けに使う）有孔鍔付土器（お酒つくりの容器や皮を張って太鼓とした説がある）があります。

深鉢は、波状口縁や平口縁があり、口縁端部が「く」の字状に折れるものとそのまま直線的に開くものがあります。文様は渦巻状の半隆帯を中心に半截竹管文を器面全体に施すダイナミックなものです。また、口縁部や文様の区切り部分にはいろいろな形の突起が付けられています。渦巻き文様には動物（蛇などの爬虫類）を模った文様がつけられる例102があります。

浅鉢は大きく皿状に開き、「く」の字に口縁部が折れるものと大きな碗状となる形があります。文様はシンプルで口縁部に沈線による格子状文や円や半円状の貼り付け隆帯による文様が施されます。また、大型品が多く作られ、口縁部に玉抱き三叉文が付けられることが特徴です。また、深鉢（95・102）では台が付く例が他地域に比べ多く見られます。

有孔鍔付土器93は胴が張った球状の形で、穴が空けられた口縁と鍔状の隆帯が付きます。文様は、動物を模った渦巻き文や大きな突起など他の土器とはやや異なったものがあります。また、赤彩されるものが多くあります。煮炊きに使われることはほとんどなく、特別な容器と考えられています。

釣手土器　ランプ形土器とも呼ばれます。浅い皿状の体部にブリッジ状の持ち手が付けられた土器で、持ち手部分の内側にはススが付着しています。動物の脂などを燃やしてお祈りなどに使う明りを灯したと考えられます。

いろいろな特徴の土器　楕円形や波状の半隆帯に沿って細かい三角のキザミを施す105で信州の新道式の影響を受けた文様です。また、口縁部に大きな突起が付けられ、縄文地に渦巻き文が施される東北地方の大木式の影響を受けた土器写真１も見られます。そのほかに関東や甲信地方の勝坂式や曽利式の影響を受けたものや新潟の三十稲場式土器があります。他地域との関係を示す貴重な例です。また、人の形をした土偶も見つかっています。

釣手土器

土偶

有孔鍔付土器　　甲信系土器、三十稲場式土器

石器写真1　磨製石斧未成品・磨製石斧

石器写真２　擦切石斧未成品、擦切具・砥石・石皿

石器写真 3　打製石斧・擦石・敲石・石棒

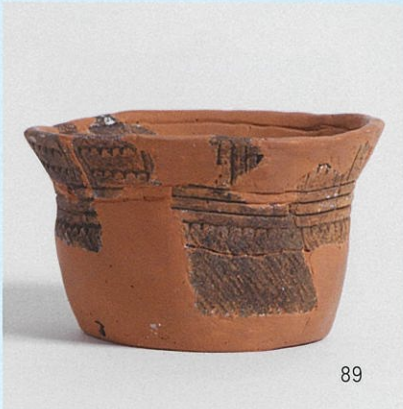
石器写真 4　円盤状石製品・磨石・敲石・石錘、石鏃、剥片・凹石・磨製石斧未成品・擦切具・磨製石斧など

石器写真５　石鏃・磨製石斧・石冠・玉類・石棒

土器写真１　大木式系土器

土器写真 2

88


89

90

91

92

93

94

95

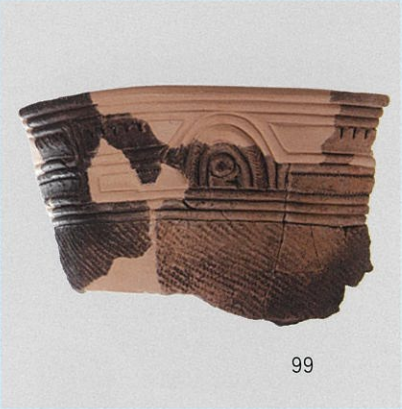
96

97

98

72

土器写真 3


99

100 - 1

100 - 2

101

102

103

104

105 - 1

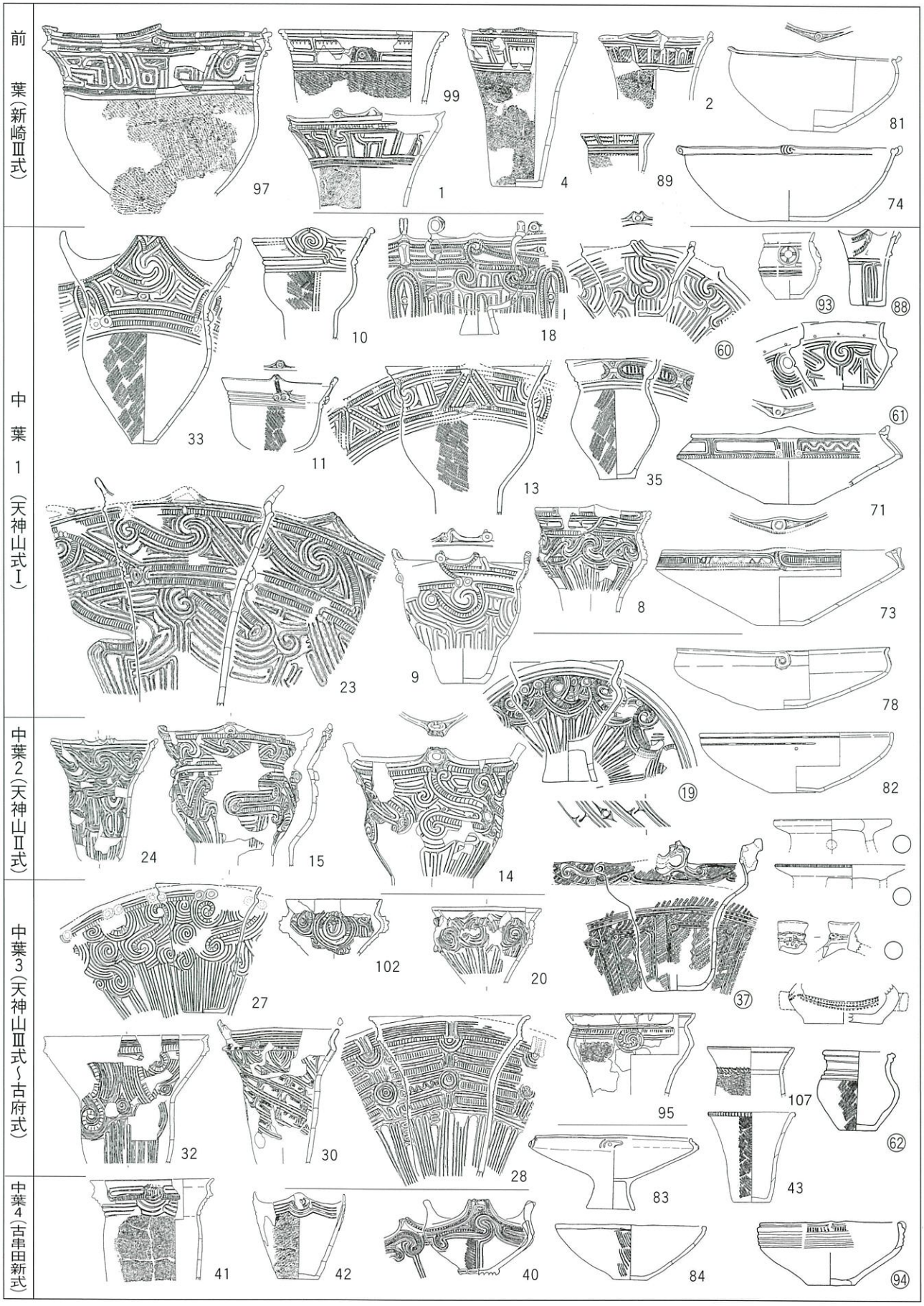
105 - 2

106

107

108

浦山寺蔵遺跡　中期前葉から中葉のおもな土器



※番号は土器写真と同じ（1／12・○は1／6）

縄文時代中期の石斧つくりのムラ
浦山寺蔵遺跡 2【土器・石器編】

発　行　日　　平成24年（2012）3月26日

編集・発行　　富山県埋蔵文化財センター

〒930－0115
富山市茶屋町206番3号
TEL　076－434－2814
FAX　076－434－2859

印　　刷　　中村印刷工業株式会社

このパンフレットは埋蔵文化財保存活用整備事業の国庫補助金をうけて作成しました。